沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展

発掘調査速報展 2014

◆開催期間◆

2014年
11／21〔金〕▶ 12／21〔日〕

沖縄県立埋蔵文化財センター

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ もくじ ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ごあいさつ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
平成 25 年度調査実施箇所 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
首里高校内中城御殿跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
首里城跡「東のアザナ北地区・銭蔵東地区」・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
【topic】首里城跡銭蔵東地区出土螺鈿関連資料 ・・・・・・・・・・・・・・・12
円覚寺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
海軍病院建設予定地内（普天間古集落遺跡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
県内遺跡（船越原遺跡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
基地内文化財（大山加良当原第四遺跡・喜友名東原第四遺跡）・・・・・・21
白保竿根田原洞穴遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
戦争遺跡（伊計島砲台跡・座波迫撃砲陣地跡・愛楽園早田壕）・・・・・・28
沖縄歴史年表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
発掘調査のきっかけ（契機）とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
平成 26 年度発掘調査等予定一覧

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報展 2014」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には集落跡や貝塚、グスク、近世古墓群など約 4,500 箇所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人が残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄の歴史・文化の研究に役立てています。

通常、発掘調査開始から出土品を整理し報告書を刊行するまで数年を要することから、前年度の発掘調査で得られた最新の情報をいち早く公開するため、「発掘調査速報展」を毎年開催しております。

今回の「発掘調査速報展 2014」では、平成 25 年度に調査を行った沖縄本島や離島における 8 事業の概要や主な成果とあわせて、平成 23 年度に調査を行った首里城銭蔵東地区の新たな成果について、出土遺物や写真パネル等で紹介しております。

首里城跡は昭和 59 年度から 29 年間にわたって発掘調査が行われており、平成 25 年度は東のアザナ北地区と銭蔵東地区において同調査が実施されました。その成果として、東のアザナ北地区から金製の厭勝銭（えんしょうせん）が確認されています。

また、白保竿根田原洞穴遺跡では、土器片、石材片のほか、人骨を多数検出し、まとまりのある頭蓋骨と上半身の骨が集中する状況が確認されるなど、先島諸島の先史文化を知る上で大きな成果を得ることができました。

この速報展を通じて、多くの方々が当センターの発掘調査と沖縄県の埋蔵文化財について親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める機会となれば幸いです。

平成 26 年 11 月 21 日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　**下　地　英　輝**

平成 25 年度調査実施箇所

戦争遺跡詳細確認調査（本島内各地）

平成25年度発掘調査一覧

遺跡名・事業名	所在地	時代区分
首里高校内中城御殿跡	那覇市首里	グスク時代～近代
首里城跡「東のアザナ北地区・銭蔵東地区」	那覇市首里	グスク時代～近代
円覚寺跡	那覇市首里	グスク時代～近代
海軍病院建設予定地内(普天間古集落遺跡)	宜野湾市普天間（キャンプ瑞慶覧内）	グスク時代、近世～近代
県内遺跡（船越原遺跡）	渡嘉敷村	縄文時代
基地内文化財(喜友名東原第四遺跡・他)	宜野湾市（普天間飛行場内）	縄文時代、弥生～平安並行時代、グスク時代、近世～近代
白保竿根田原洞穴遺跡	石垣市盛山～白保	後期更新世～グスク時代
戦争遺跡(座波迫撃砲陣地跡・他)	本島内各地	近代

首里高校内中城御殿跡

しゅりこうこうないなかぐすくうどぅんあと

事　業　名：首里高校内中城御殿跡発掘調査

所　在　地：那覇市首里真和志町 2-43

時　　代：グスク時代～近代

調査期間：2013（平成 25）年 7 月 29 日～ 2014（平成 26 年）3 月 28 日

調査内容：　中城御殿は、次の琉球国王となる王子が暮らした屋敷です。当初その建物は、1621 ～ 1640 年の尚豊王代に、現首里高等学校敷地内に創建されました。1700 年頃に作られた「首里古地図」によると、石垣で囲われた敷地の中に 15 棟ほどの建物が建っていたことがわかります。

その後、1875（明治８）年に旧県立博物館跡地に移転しました。

この遺跡では、中世～近代までの約 500 年間にわたって人が生活した跡が見つかりました。

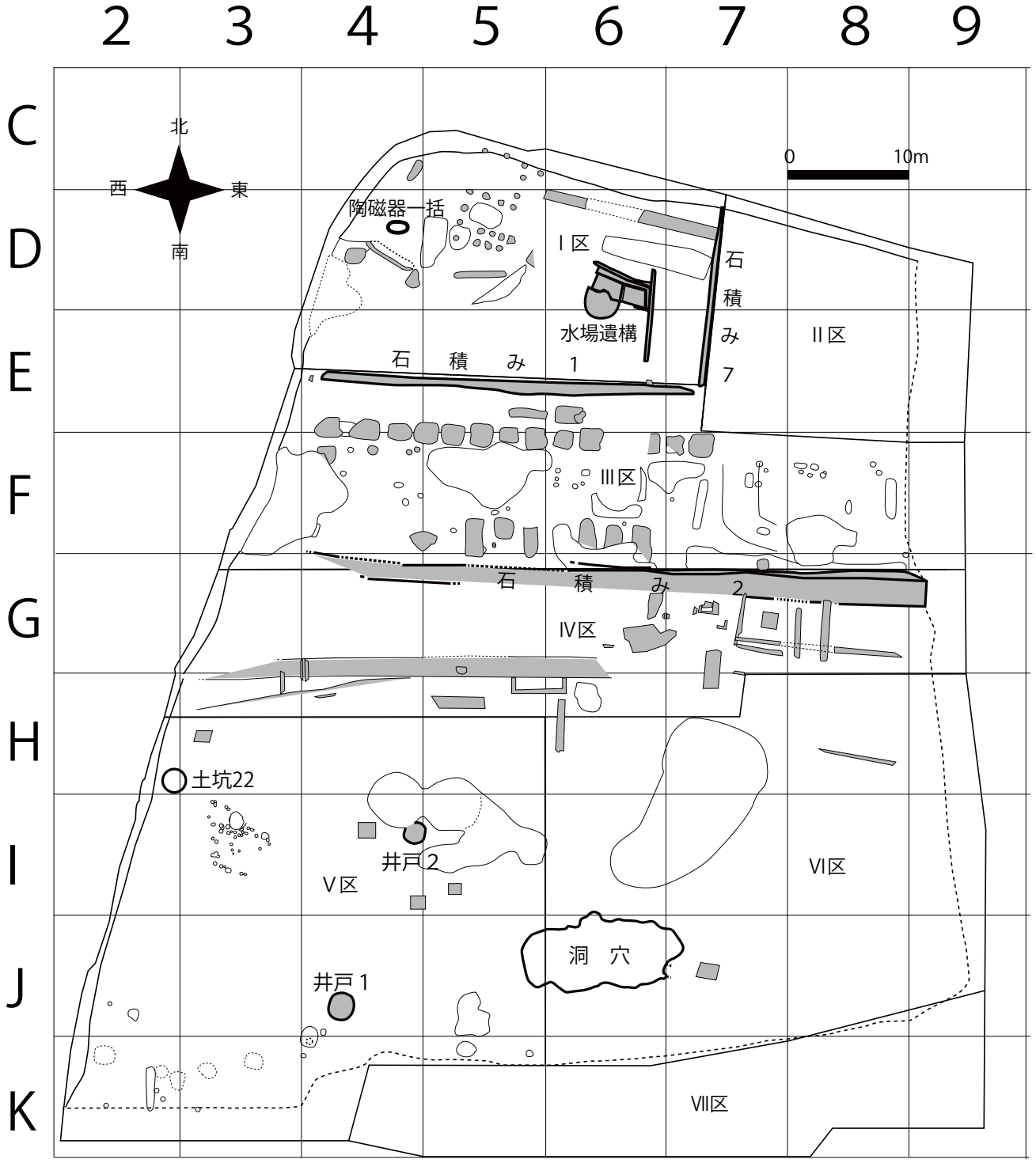
中世では、中城御殿が建てられる前の、15 ～ 16 世紀の建物の柱や、ごみを捨てた穴などがあります。

近世では、建物の柱を支える根固め石、建物の周辺に敷かれた石敷き、井戸や排水施設を備えた水場、区画のための石積みなど中城御殿に関する様々な遺構があり、遺跡の中核をなしています。１つの遺構でも、石の大きさや形、積み方などに違いがあることから、改築しながら利用した遺構もあることがわかりました。

また、大量の造成土や土留めの石積みによって、階段状の平場を造っていることがわかりました。これは斜面だった場所に、建物を建てて住みやすくするために行われた土木工事の跡です。

近代では、中城御殿が移転した後に建てられた沖縄県立第一中学校などの校舎や池に関する遺構があります。

出土品には、沖縄で作られた陶器のほかに、海外交易によって持ち込まれた中国、東南アジア、日本産の陶磁器があります。また動物や魚の骨、屋根瓦、キセル、鳥のエサ入れ、かんざし、すずり、制服のボタンなどがあります。



首里高校内中城御殿跡　遺構配置図

水場遺構

石積み 1

首里城跡（しゅりじょうあと）「東のアザナ北地区（あがりきたちく）・銭蔵東地区（ぜにくらひがしちく）」

事　業　名：首里城跡発掘調査
所　在　地：那覇市首里当蔵町 3-1
時　　代：グスク時代～近代
調 査 期 間：2013（平成 25）年 7 月 1 日～ 2014（平成 26 年）3 月 27 日
調 査 内 容：　本事業は、沖縄戦で焼失した首里城の復元整備を行うため、必要な情報を得ることを目的とした発掘調査です。昨年度は、8 ページの図に示した場所で発掘調査を実施しました。以下、調査成果を東のアザナ北地区と銭蔵東地区の２ヶ所に分けて紹介します。

東のアザナ北地区

この地区では、城壁の一部と考えられる石積みと、平面観が「コ」の字形を呈する石積みのほか、昨年度に一部を検出していた洞穴遺構と、沖縄戦時に構築された壕の全容を確認することができました。

城壁石積みは方形石材を用いて積み上げられたもので、縦横に目地が通る部分が多くみられる特徴や、延長部が外郭城壁の下部に潜り込んでいること、城壁石積み廃絶時の埋土から 17 世紀以降の遺物が出土しないことなどから、外郭城壁が構築される 16 世紀中葉より前に存在した城壁の一部と考えられます。

「コ」の字形石積みは崖面を垂直に切った琉球石灰岩岩盤の頂部に積み上げられており、石材は城壁石積みと同じく切り石を用いています。当該遺構の性格や構築年代は不明ですが、古地図などから 17 世紀後半には存在していたと考えられます。また石積みの基部や内側からは銭貨が多く出土しており、その中には斎場御嶽など限られた遺跡でしか確認されていない金製の厭勝銭も含まれるため、かつて首里城内にあった 10 ヶ所の御嶽のひとつかもしれません。

洞穴遺構では内部にトレンチを設定して床面の堆積状況を確認したところ、北側半分は 14 世紀末～ 15 世紀前半に、南側半分は近代に造成されたことがわかりました。また近代の記録にも、ここを避難壕に利用するために内部を掘り広げたとの内容がみられることから、当該遺構は 14 世紀末～ 15 世紀前半に構築された施設（かつては墓のような性格を持っていたと想定）を近代に改変した結果、現在のような状態になったと考えられます。

壕は沖縄県師範学校の学生たちが構築・使用した避難用の「留魂壕」の坑口２ヶ所と、沖縄新報が使用した「新聞壕」の坑口１ヶ所を検出しました。特に新聞壕の坑口付近からは、新聞作成に使用したとみられる金属製の活字が多数出土し、壕内で新聞を作成していたという証言記録を裏付ける調査成果が得られました。

銭蔵東地区

この地区は平成 23 年度調査区の北側に隣接する場所です。調査の結果、平成 23 年度に検出した石積みの北側延長部が確認されました。石積みの前面からは 16 世紀～ 17 世紀の遺物が大量に出土していることから、この時期に構築されたと考えられます。

首里城跡発掘調査　平成 25 年度調査区

東のアザナ北地区

全景 (北西より)

城壁石積みと「コ」の字形石積み (北より)

城壁石積み (東より)

金製厭勝銭

東のアザナ北地区

洞穴遺構外観 (北より)

洞穴遺構内床面北側造成状況 (西より)

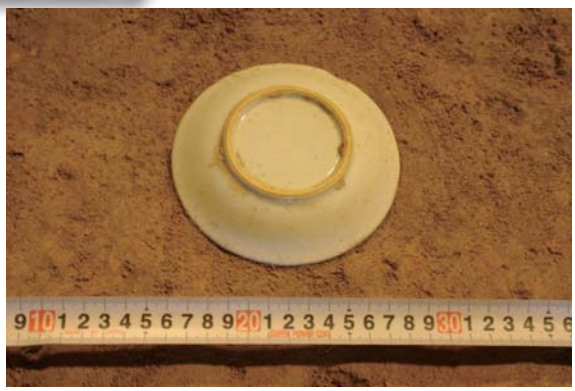
洞穴遺構内遺物出土状況 (東より)

洞穴遺構内床面南側造成状況 (東より)

洞穴遺構前床面造成状況 (西より)

東のアザナ北地区

「留魂壕」内坑道検出状況 (西より)



「留魂壕」内遺物出土状況

「留魂壕」坑口２検出状況 (北西より)

「新聞壕」坑口 (西より)

銭蔵東地区

銭蔵東地区・石積み (北西より)

【 topic 】首里城跡銭蔵東地区出土螺鈿関連資料

平成 23 年度に調査を行った銭蔵東地区について、調査報告書作成のために資料整理を行っており、新たな資料を確認しました。

銭蔵東地区では、外郭を造成するための４m以上の盛土が見つかっており、そのうち 16 世紀代と考えられる土層より、多くの貝が集中して出土した場所「貝だまり」を確認しました。その貝だまりからは、ヤコウガイ、チョウセンサザエ、サラサバティといった真珠層が良好に見られる貝殻の破片が大量に出土しました。これらは、殻頂という固く厚く使用しにくい部分がほとんどで、完形の貝殻はないことから、螺鈿に使用した貝殻の残骸を捨てた場所として、平成 24 年度の速報展でも展示いたしました。その時点では、数センチから数ミリという細かな破片もありましたが、まだ資料整理が進んでいない段階であったため、貝殻からこぼれ落ちたものぐらいしか考えていませんでした。

今年度の資料整理において、貝の専門家である黒住耐二さん（千葉県立中央博物館）に貝の種類について指導をいただいたところ、これらの小片が自然ではここまで割れることは難しく、人の手が加わっていることを指摘されました。現在、色んな専門家の意見も聞きながら、螺鈿の破片として資料整理を進めているところです。

これらの小片には、長方形やしずく状に加工し、明らかに研磨された痕があります。また、ヤコウガイは薄い部分でも３ミリ程度あり、０．１ミリ程度に薄くなっている破片もあり、これは自然でこの形になるのは難しいようです。これまで、琉球での螺鈿製作は、1612 年に貝擦奉行が設けられ、首里城に近接する御細工所で螺鈿生産が始まったとされていました。今回の発見は、それより古く首里城内で作られていた可能性が指摘できる資料と言えます。

貝だまり

ヤコウガイ (中央)・サラサバティ (左前)・チョウセンサザエ (右前)

貝殻小研磨片

円覚寺跡（えんかくじあと）

事　業　名：円覚寺跡発掘調査
所　在　地：那覇市首里当蔵町 2-1
時　　代：グスク時代～近代
調 査 期 間：2013（平成 25）年 7 月 1 日～ 2013（平成 25 年）10 月 1 日
調 査 内 容：　円覚寺は、1492 年から約 3 年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院です。その創建は、尚真王（第二尚氏王統第三代）が父親である尚円王の御霊を祀るために建立したと伝えられ、第二尚氏の菩提寺でもありました。現在は国の史跡に指定されています。

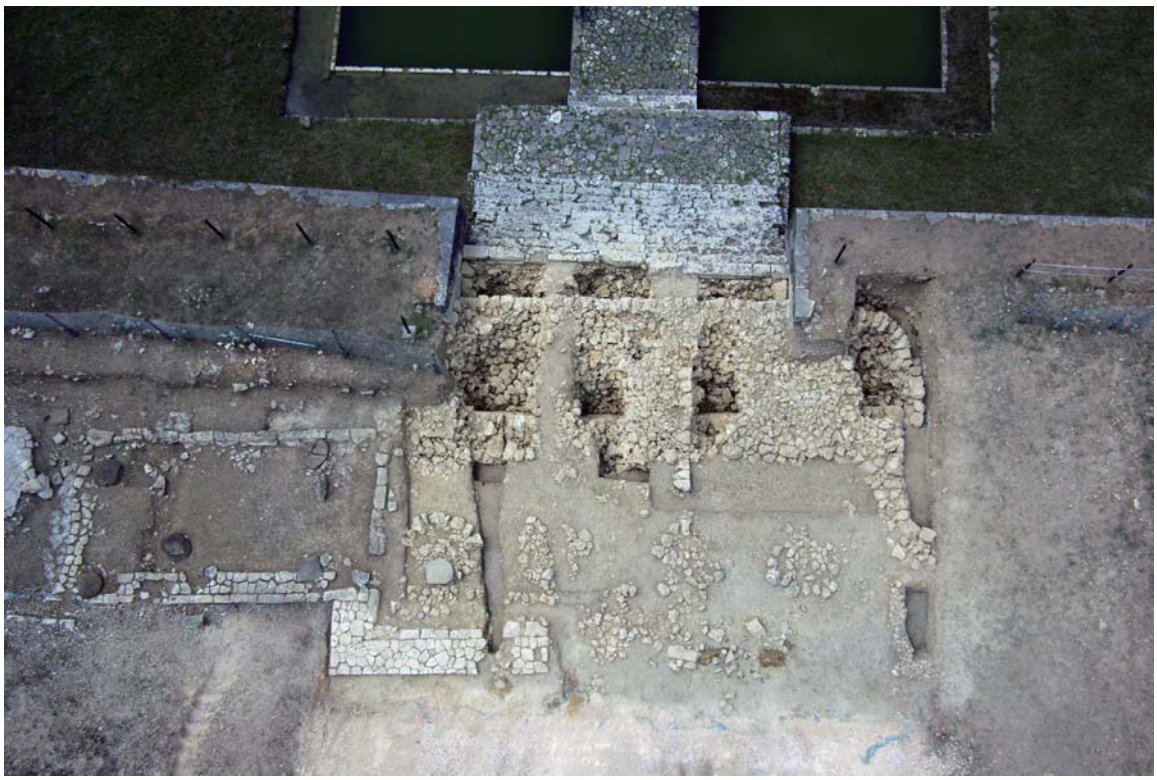
　かつて円覚寺の境内に数多く存在した建造物は、沖縄戦により首里城とともに破壊されますが、往時の姿を復元することを目的に、平成 9 年から平成 13 年までの 5 か年間、遺構確認調査が行われました。その調査成果などを基に翌年の平成 14 年度からは、円覚寺跡の外周を囲う石牆（せきしょう）の復元整備を実施しています。その一環で平成 19 年度から今日まで継続して遺構確認調査を実施しています。

　平成 25 年度の調査は、三門の復元整備に向けた遺構確認を目的として、発掘調査を行いました。

　調査の結果、礎石を固定するために配置したと考えられる基礎の石が複数見つかりました。これは三門の柱配置を捉える上で大きな手がかりとなるものです。その他にも、円覚寺を建造するにあたり、土地を造成するために築いたと考えられる土留めの石積みなどを確認することができました。

　このように、遺構については様々なものが見つかりましたが、遺物については出土量が僅かでした。そのため、今回見つかった遺構の構築時期を把握することは難しいのですが、土留めと考えられる石積みに伴う造成土より、タイ産褐釉陶器の胴部片が見つかっています。

調査区全景 (北から)



遺構検出状況 (東から)

礎石を固定するための基礎の石 (西から)

土留めの石積み (西から)

海軍病院建設予定地内（普天間古集落遺跡）

かいぐんびょういんけんせつ よ てい ち ない　ふ てん ま こ しゅうらく い せき

事　業　名：海軍病院建設予定地内発掘調査
所　在　地：宜野湾市普天間（キャンプ瑞慶覧内）
時　　代：グスク時代、近世～近代
調 査 期 間：2013（平成 25）年９月 12 日～ 2014（平成 26 年）２月７日
調 査 内 容：　本事業は、宜野湾市にある米軍基地内（キャンプ瑞慶覧）において、病院建設に伴って現状のまま残すことができない埋蔵文化財の記録を作成することを目的とした緊急発掘調査です。

平成 25 年度の調査は、普天間古集落遺跡が広がる範囲において実施しました。その結果、グスク時代、近世～近代の２時期に相当する遺構や遺物が確認されました。

グスク時代の遺構は、多くのピットや土坑が確認されています。ピットの平面的な位置関係や埋土を検討し、この中で４本柱の掘立柱建物跡を想定することができました。このほかに、深さが 2m 近い大きな土坑も検出されています。これら建物や構造物などの配置からはグスク時代における集落の様相を窺うことができます。遺物はグスク土器、カムィヤキが僅かに出土しています。

近世～近代に相当する時期は、遺構・遺物ともに多く確認されています。溝状遺構を中心にピット、土坑、井戸、枡状遺構、避難壕など普天間古集落にかかわる多種多様な遺構が確認されています。出土遺物は、沖縄産や本土産の陶磁器を中心に中国産磁器、瓦、金属製品など、多様な遺物が出土しています。

平成 20 年度から海軍病院建設予定地内の発掘調査ですが、平成 25 年度で調査は終了しました（沖縄県調査対象エリア）。調査区からは縄文時代からグスク時代、近世～近代までの時期にわたって多種多様な遺構や遺物が確認されています。現在は、これまでの調査成果をまとめ、報告書刊行に向け資料整理作業を進めています。

発掘作業状況 (2 地点)

井戸断割状況 (2 地点)

遺構完掘状況 (1 地点)

遺構完掘状況 (2 地点)

県内遺跡（船越原遺跡）

事　業　名：県内遺跡詳細分布調査
所　在　地：渡嘉敷村船越原
時　　代：縄文時代
調査期間：2013（平成25）年７月９日～７月19日、８月26日～9月19日
調査内容：　これまで埋蔵文化財の分布状況の把握が不十分であった慶良間諸島（渡嘉敷村・座間味村）において、平成22～26年度の予定で遺跡分布調査を実施しております。

平成25年度は渡嘉敷村船越原遺跡の範囲確認調査を実施しました。

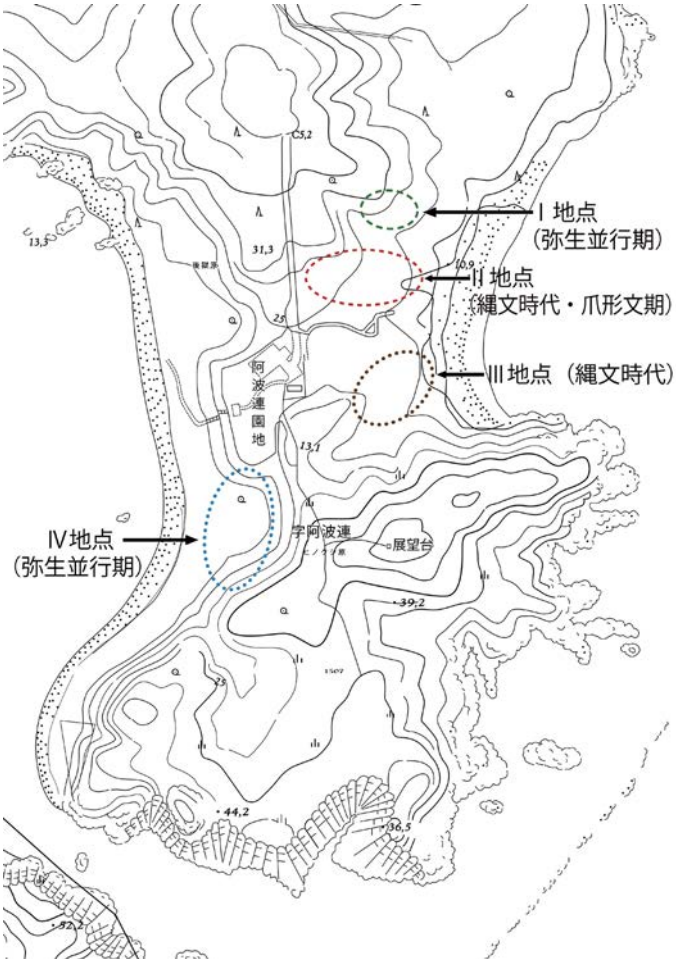
船越原遺跡は、渡嘉敷島南端の海岸砂丘に位置する縄文時代前期～弥生並行期（約6,000～2,000年前）の遺跡で、昭和50（1975）年の採砂時に、大学生が多くの土器を発見しました。県内でも10数遺跡でしか見つかっていない爪形文土器（約6,000年前）や、類例が少ない神野Ａ式土器（約5,000年前）などが出土していること、石斧などの材料となる石材が島内に分布することから、重要な遺跡と考えられていました。しかしながら、本格的な発掘調査が行われることなく、遺跡の崩壊が進み、その保存が懸念されていました。

そこで、当センターでは、当遺跡の保存策を検討するために、平成22・23年度に船越原遺跡周辺の地形測量を行い、平成24年度より範囲確認調査を開始することになりました。今回の調査では、爪形文土器が散在し、その包含層が露頭しているⅡ地点と、過去に土器が採集されたⅢ地点とⅣ地点において試掘調査を行いました。その結果、Ⅱ地点では6120ETYにおいて土器片が、6018Aにおいて爪形文土器が含まれているⅢＢ層と土器片が出土しました。また、6018A地点においてⅢＢ層の上層のⅢＡ層より、緑色片岩や砂岩など石器に利用されることの多い石が集中して出土しました。これらの石の出土したⅢＡ層は爪形文土器の時期より新しいことが年代測定により分かりました。今回の調査ではⅢＢ層よりこのような石が出土することはありませんでしたが、前年度の調査では確認されていることから、船越原遺跡は石を求めた人達が活動した場所ではないかと考えられます。

今回の調査ではこの２か所の試掘箇所以外からは土器や包含層を確認することができませんでした。このことからⅡ地点は海岸より西に約150mの場所に直径30mの範囲に広がっていると考えられます。

Ⅲ・Ⅳ地点では合わせて19か所の試掘調査を行いましたが、今回の調査では明確な遺構や遺物包含層は確認できませんでした。

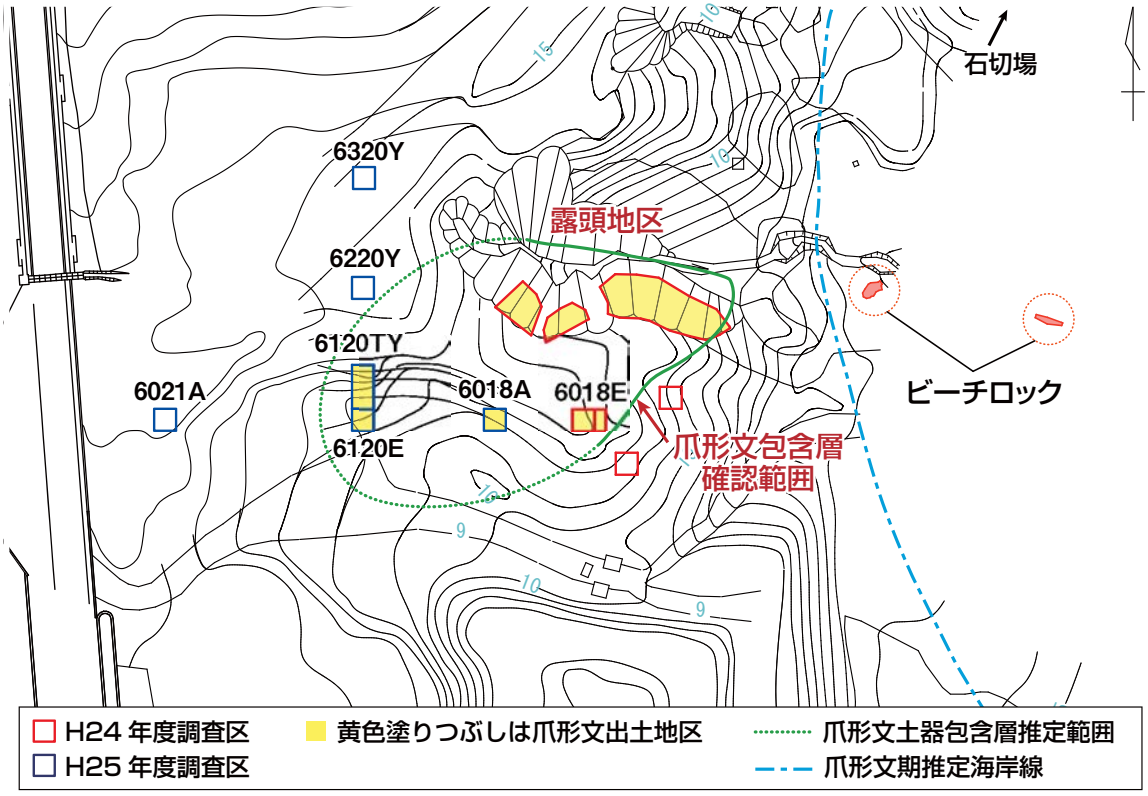
現在船越原遺跡はⅡ地点の露頭部分の埋戻しを行い、遺跡を保護している状態です。



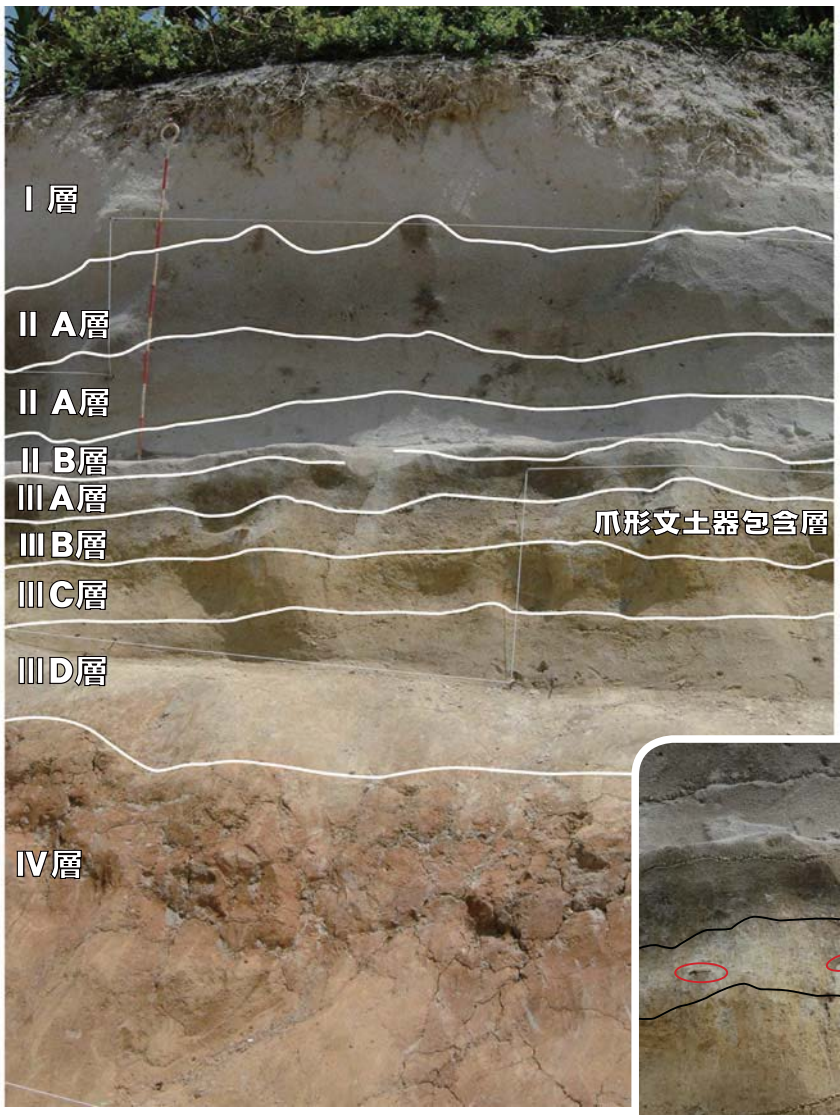
船越原周辺地図及び調査地点位置図

船越原遺跡　遠景（南より）

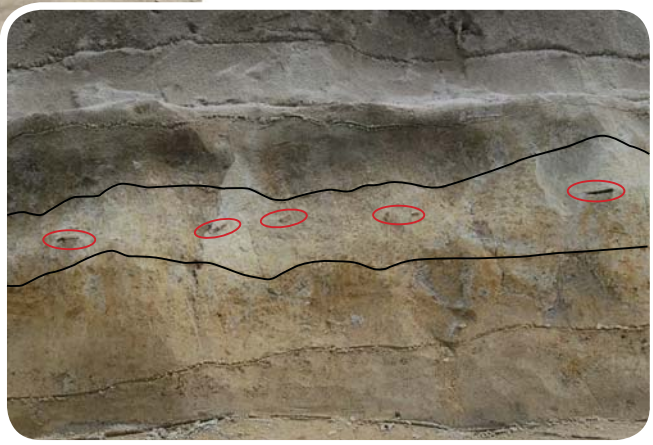
Ⅱ地点露頭部分　遠景（北より）



Ⅱ地点調査位置（拡大図）



Ⅱ地点層序



Ⅱ地点露頭部分　清掃途中状況 (○が爪形文土器)

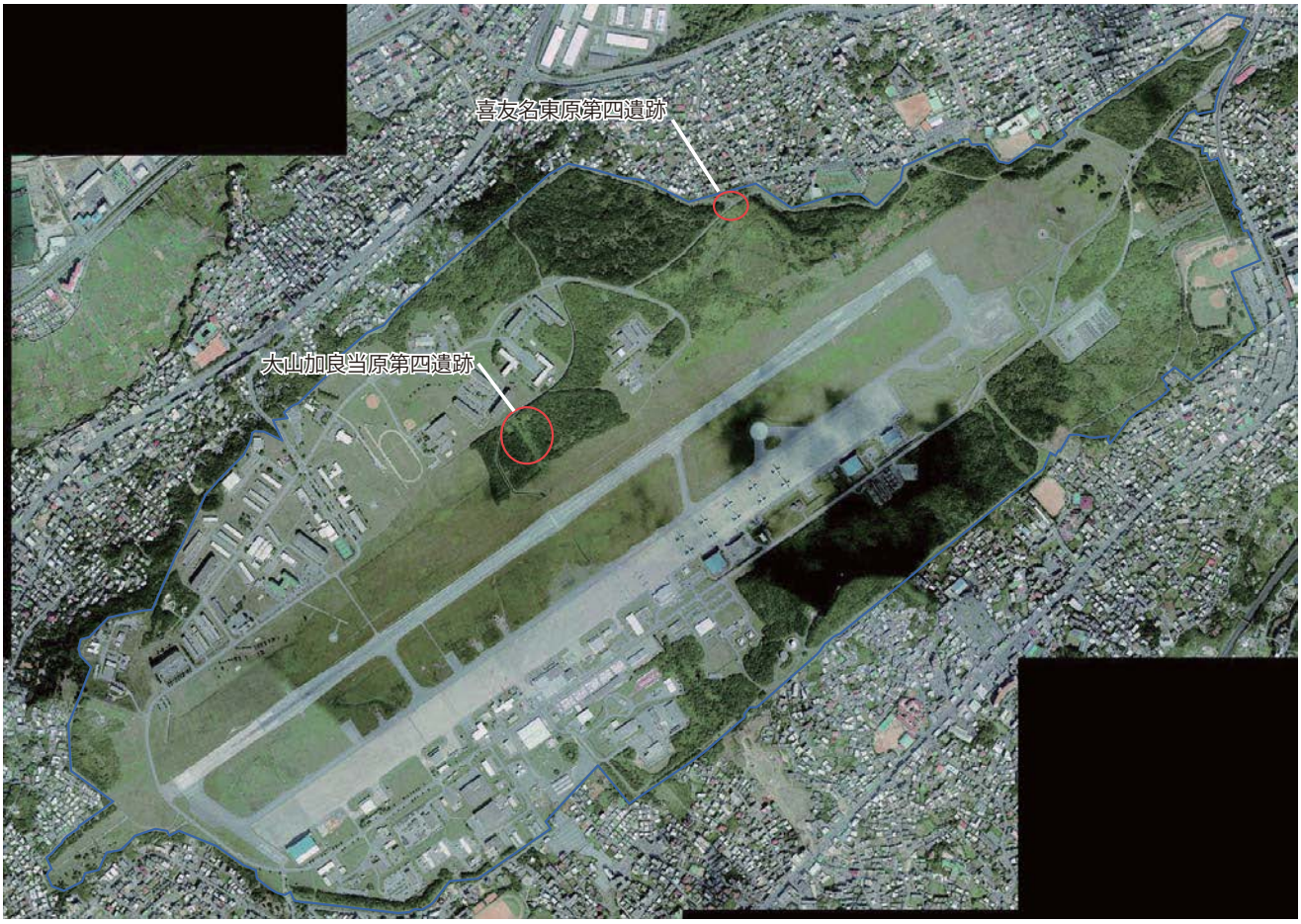
6018A 礫片出土状況 (西より)

基地内文化財（大山加良当原第四遺跡 喜友名東原第四遺跡）

事　業　名：基地内文化財分布調査

所　在　地：宜野湾市（普天間飛行場内）

調 査 内 容：　平成 25 年度は、昨年度より調査を行っている大山加良当原第四遺跡と、新たに喜友名東原第四遺跡の２か所を調査しました。大山加良当原第四遺跡はボーリング調査によって、かつての地形を推定するための資料が得られました。喜友名東原第四遺跡では縄文時代の終わり頃の遺構と遺物が発見され、この時期の人々の暮らしぶりを知る上で貴重な成果が得られています。



平成 25 年度調査対象遺跡の位置

大山加良当原第四遺跡は普天間飛行場の中央、喜友名東原第四遺跡は北側に立地する。喜友名東原第四遺跡の周辺には喜友名東原ヌバタキ遺跡などの縄文時代晩期の集落遺跡が点在する。

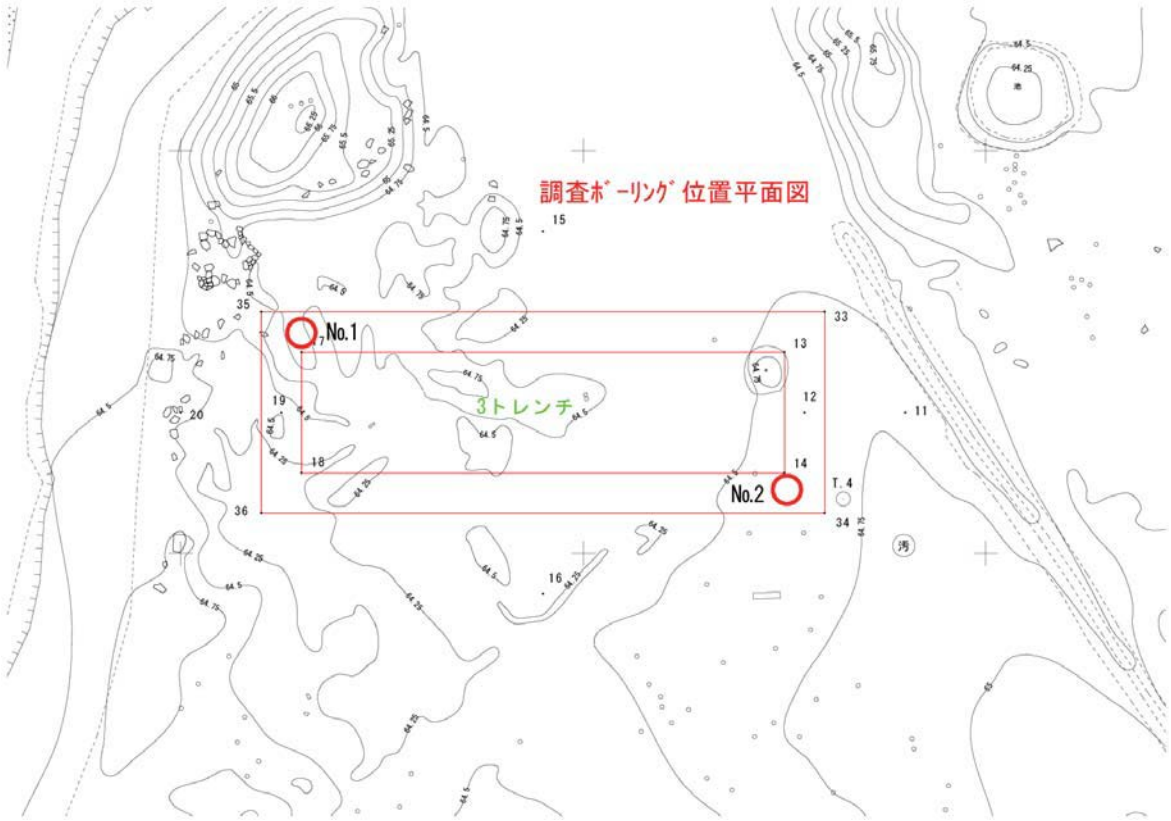
Ⅰ 大山加良当原第四遺跡

時　　代：縄文時代後期～晩期、弥生～平安並行時代末、グスク時代初頭、近世・近代
調 査 期 間：2014（平成 26）年 2 月 19 日～ 2014（平成 26 年）2 月 24 日

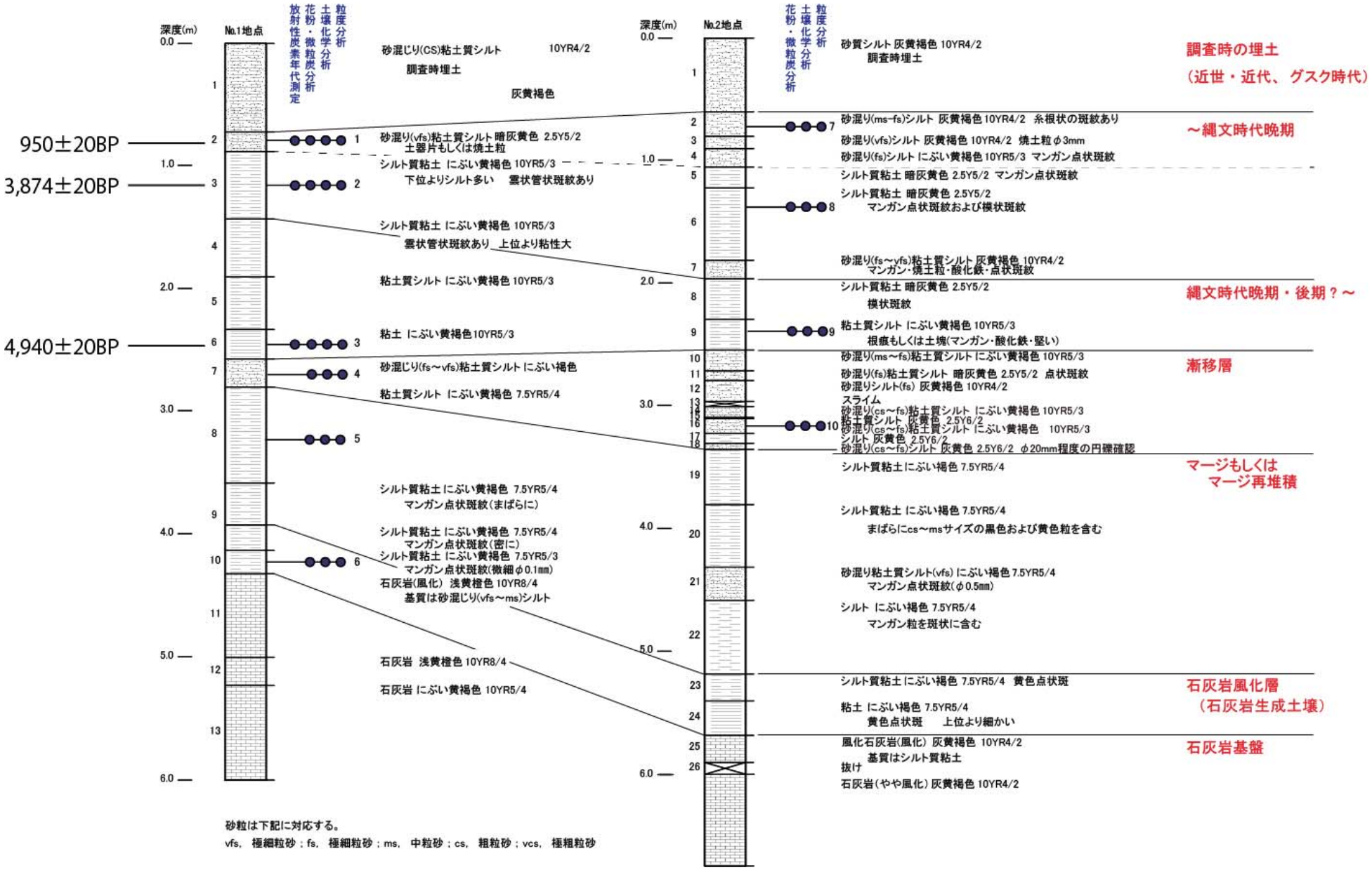
大山加良当原第四遺跡は、基地内文化財分布調査事業の平成 19（2007）年度に試掘調査で発見された遺跡です。遺跡の性格や範囲を知るため、平成 20（2008）年度から確認調査を行っています。

これまでの発掘調査によって、近世・近代の溝状遺構、遺物廃棄土坑、柱穴が検出されているほか、弥生～平安並行時代からは焼土面も検出されています。また縄文時代の地層からは、多数の縄文土器片、磨製石斧 1 点、遠隔地の石材が出土しています。

平成 25 年度は遺跡の地層の堆積状況などを調査するために、ボーリング調査を行いました。その結果、近世・近代の地層が耕作によって作られた地層であることが、検出された花粉や微粒炭の量によって裏付けられました。また縄文時代の遺物を含む黄褐色で粘土質の地層は、赤土が再堆積した後に長年の水の影響で養分が失われた土であることが分かりました。この地層とその下の赤土層が最も厚いこと、岩盤を確認するまでの深度が、No.1 地点で約 4.7 m、No.2 地点で約 5.8 mだったことから、3 トレンチは埋没谷であることを確認することができました。つまり谷状の地形に赤土と黄褐色で粘土質の地層が流れ込んだことで谷を徐々に埋めていき、その土の中に縄文時代の遺物が含まれていたようです。



大山加良当原第四遺跡のボーリング調査箇所
No.1 とNo.2の二か所でボーリングを行った。No.2付近では前年度までの調査で縄文土器などの遺物が出土している。



大山加良当原第四遺跡　ボーリングコア柱状図

Ⅱ 喜友名東原第四遺跡

時　　代：縄文時代晩期末、グスク時代初頭（？）、近世・近代
調 査 期 間：2013（平成 25）年 12 月 10 日～ 2014（平成 26 年）2 月 24 日

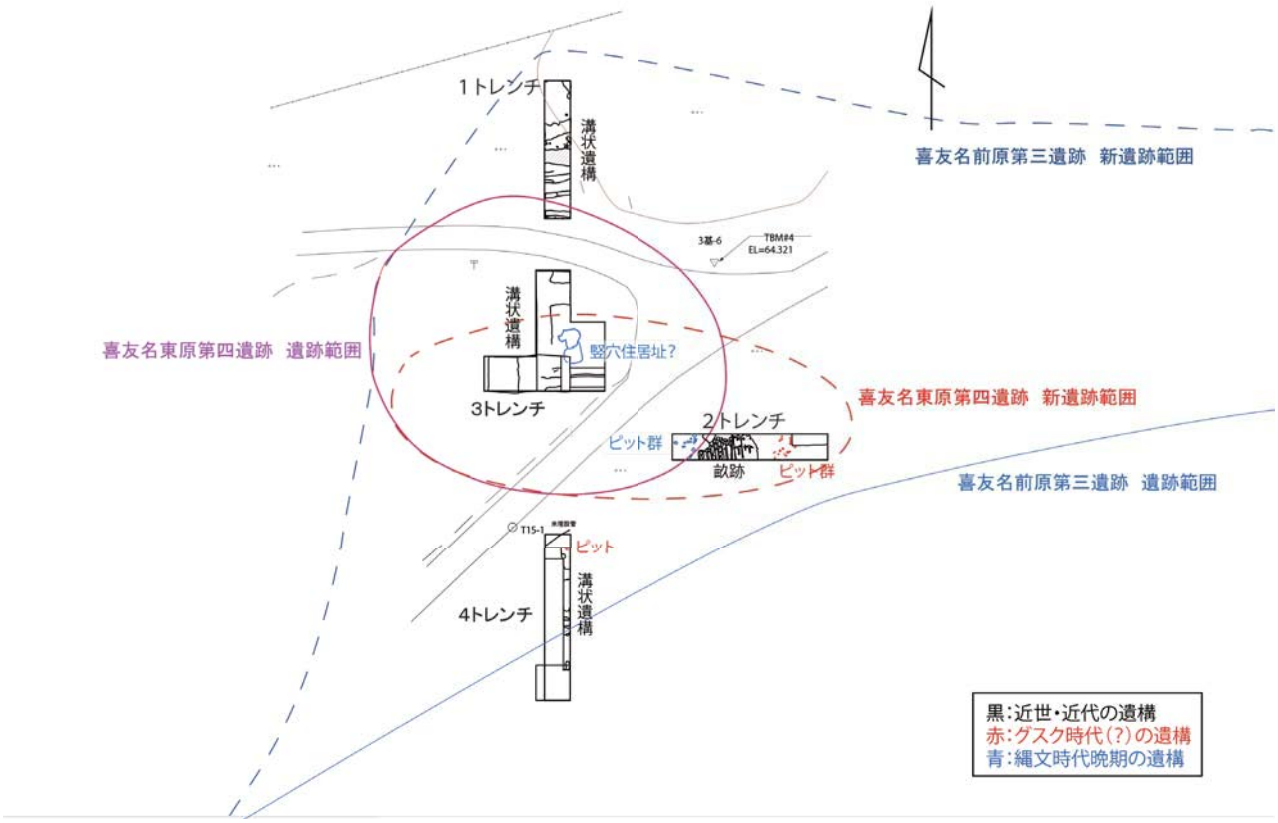
この遺跡は、基地内文化財分布調査事業の平成 14・15 年度の試掘調査によって縄文時代の遺物包含層が確認され、遺跡があることが分かりました。それを踏まえて、平成 25 年度はこの遺跡の範囲と性格を確認するために調査を行いました。

発掘調査によって、近世・近代、グスク時代、縄文時代の３つの時代の遺構や遺物が出土しました。近世・近代の遺構には、溝状遺構とその間に多数の鍬跡が検出されました。溝状遺構には、溝内を石で埋めたもの（SD8）や、側面に土留めのための石積みを敷設したもの（SD9）も含まれていました。遺物は沖縄産陶器が中心で、他に遊び道具と考えられている円盤状製品や、キセル、かんざしなどが出土しました。

グスク時代と考えられる遺構は南側で見つかり、全 27 基中 26 基のピットはまとまっています。これらのピットの中には、柱穴と考えられるものも含まれますので、グスク時代の頃には掘立柱建物跡が存在していた可能性が挙げられます。ただし確実にグスク時代と言える遺物は出土していません。

縄文時代の遺構は南側と中央部で検出されています。南側ではピット 14 基がまとまって検出され、この中には柱穴と考えられるものが１基含まれますが、性格は不明です。遺構の周辺には縄文時代の土器が多量に出土しています。口縁部の資料の形などから、縄文時代晩期の土器だということが分かります。また中央部からは、竪穴住居址の可能性のある遺構が検出されています。この遺構は、３基もしくは４基が重なり合っている状況が遺構中央の調査した壁面から理解することができますので、建替えを繰り返しながら利用されていたようです。この遺構からは出土している土器は、口縁部片の形状などから縄文時代の終末段階に作られたものと考えられます。土器に付着した炭化物や遺構から検出した炭化物による放射性炭素年代測定でもおよそ 2400 ～ 2600 年前という結果が出ており、この年代観を支持しています。ほかに敲石・磨石や石皿・台石が出土しているほか、黒曜石の破片４点やサメ歯も出土しています。黒曜石は遺跡の北側でも１点出土していますが、この石は琉球列島では産出しないためか沖縄県内でも出土事例が少なく、このように複数点が同じ遺構から出土した事例は極めて少なく貴重な成果です。蛍光Ｘ線分析によって、５点とも佐賀県腰岳産という推定結果が得られています。他の石器の石材にも沖縄本島北部や久米島の石が用いられており、当時の交流を示す証拠として重要です。また旧地形を知るために部分的に岩盤の確認も行いました。その結果、中央部が高台で南側は谷だったことが分かりました。

この調査によって、この遺跡は沖縄県の縄文時代研究にとって重要な成果であるとともに、遺跡の所在する喜友名地区の縄文時代から近世・近代までの土地利用の変遷過程を知ることの出来る貴重な遺跡です。



喜友名東原第四遺跡から検出された遺構

喜友名東原第四遺跡から出土した遺物

左上：縄文時代終末段階の土器
　　頸が屈曲するのが特徴的。
右上：県内各地の石材で作られた石器
　　チャート、緑色片岩、砂岩、緑色凝灰岩などが利用されている。
左下：黒曜石
　　縁辺には使用による微細剥離がみられる。

しらほさおね たばるどうけつ いせき

白保竿根田原洞穴遺跡

事　業　名：白保竿根田原洞穴遺跡確認調査

所　在　地：石垣市字盛山～字白保

時　　代：後期更新世～グスク時代

調査期間：2013（平成 25）年 10 月 7 日～ 2013（平成 25 年）12 月 6 日

調査内容：　琉球列島の島々は、琉球石灰岩で覆われた地域が多く、人骨が化石として残りやすいことから、旧石器時代の化石人骨が数多く出土することで知られています。これまで、沖縄本島や伊江島、久米島、宮古島などの島々において、10 か所前後の遺跡が発見されていますが、八重山諸島では未確認の状態が続いていました。

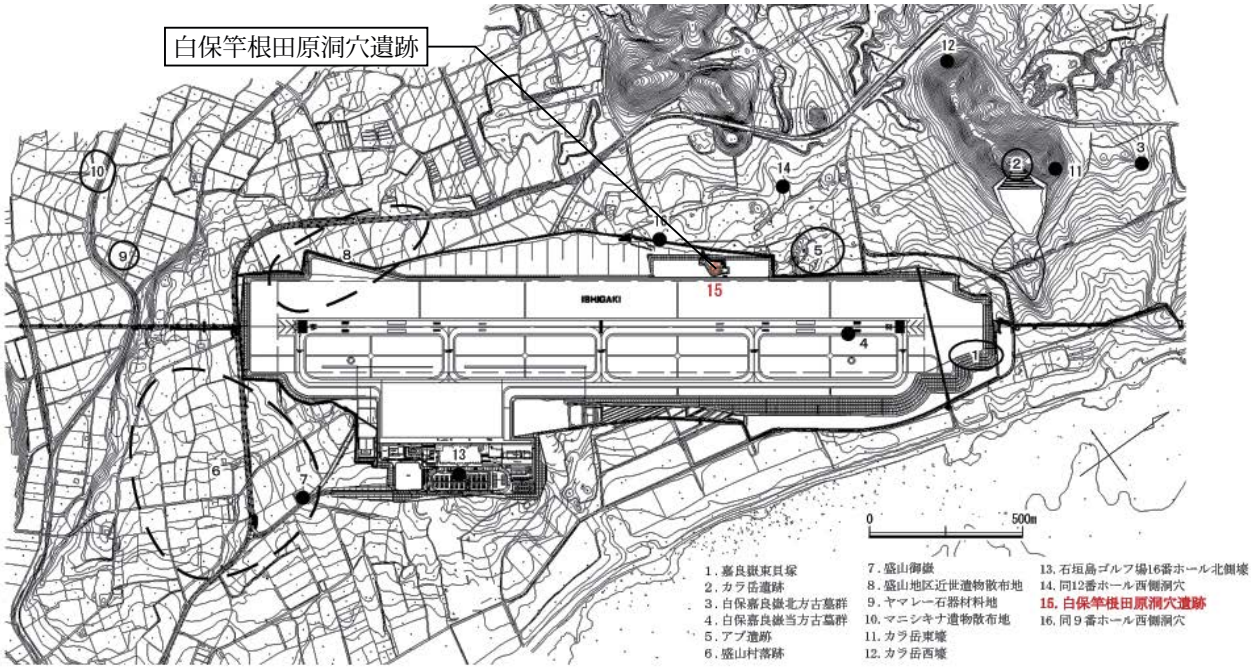
このような中で、2010（平成 22）年度に行われた新石垣空港建設に伴う発掘調査（以下「第 1 次調査」）で出土した人骨が、約 20,000 年前の後期更新世のものであることがわかり、その頃の石垣島に人類が到達していたことを明らかにしました。

その後、沖縄県立埋蔵文化財センターでは、遺跡のより詳細な性格・範囲を確認する目的で、平成 24 年度から重要遺跡確認調査を行っています。平成 25 年度は 10 月から 2 か月間にわたり発掘調査を実施しました。調査にあたっては、出土遺物の理化学分析に支障がないよう、また、出土状況の再検証が可能なように、遺物の検出や記録、取上げ、運搬、分析試料サンプリングに至るまで慎重かつ迅速に行うよう努めました。

平成 25 年度の調査は、第 1 次調査時に残した断面観察用ベルト（畔）を中心に発掘を行いました。その結果、Ⅲ B 層（8,500 ～ 9,500 年前 BP）からは多量のイノシシ骨とともに、土器片、石材片を検出しました。また、後続するⅢ C 層（16,000 ～ 18,000 年前 BP）においては人骨を多数検出しました。特に G5 グリッドにおいては、まとまりのある頭蓋骨とともに、周辺に上半身の骨が集中して出土する状況が確認されました。これにより人骨がある程度、原位置を保った状態で埋蔵されていることが確認できました。今後は遺物の位置関係や接合状況ならびに、同一個体かどうかを検討しながら出土状況をまとめるとともに、年代測定や DNA、形質学的な分析を行う予定です。

なお、調査期間中には、石垣市教育委員会及び日本人類学会の協力により、現地説明会と講演会を行い、多くの石垣市民に参加いただきました。

今後の計画として、平成 26 年度まで確認調査を行うとともに、遺跡の適切な評価・保存法や、地域での活用法について検討し、その後、調査報告書を刊行する予定です。



新石垣空港と周辺の遺跡

白保竿根田原洞穴遺跡調査状況

戦争遺跡（伊計島砲台跡・座波迫撃砲陣地跡・愛楽園早田壕）

事　業　名：戦争遺跡詳細確認調査
調　査　地：沖縄本島
時　　代：近代
調 査 期 間：2013（平成 25）年５月 15 日～ 2014（平成 26 年）３月 31 日の間随時
調 査 内 容：　近代、主に沖縄戦において残された戦争遺跡について、文化財指定などの保存を検討するために測量等の記録調査行っています。平成 25 年度は、これまでの調査で重要性が指摘された沖縄本島の戦争遺跡について、測量等の記録調査を行いました。ここでは、その幾つかを紹介します。

うるま市伊計島砲台跡

伊計島の西方に現在は灯台がある場所に、砲台跡２基が確認されています。太平洋戦争開戦直前の南西諸島の海岸警戒のため、昭和 16 年 10 月に中城湾臨時要塞砲兵連隊第２中隊が伊計島に配備されており、おそらくこの関連部隊が築造したものと考えられます。両砲台は、径 1.6 mの砲座と、径約６mの周壁をコンクリートで造っており、弾薬庫は戦後の破壊により残っていなかったが、おそらく周壁に取りつくように２か所あったと見られます。東側の砲台には、周壁の床面に集水桝と海側に伸びる陶器製の排水管を確認しました。また、前述の部隊の後身である重砲兵第７連隊第２中隊が知念に移り築造したとされる知念岬にあるウローカー砲台跡とその構造が非常に類似しています。

東側砲台跡全形

西側砲台集水桝

糸満市座波迫撃砲陣地跡

座波集落北側の標高約 60 mの丘陵に、砲掩体と考えられる土坑３基、人工壕２基が残存しています。これまで、独立迫撃砲第９中隊が築造したと考えられていましたが、関連資料の精査により、独立迫撃砲第８中隊が昭和 19 年 10 ～ 11 月にかけて築造した可能性が高くなりました。資料によると、砲掩体は 12 基計画されていたようです。米軍上陸後は、第 32 軍司令部の南部撤退を契機に、５月後半から６月にかけて、独立迫撃砲第３・４・８中隊が使用し、米軍との交戦で戦死者もあったようです。砲掩体は、径約４m、深さ２mの入口を設けた土坑に、長さ５～７mの直線的な坑道を取り付けた構造となっています。土坑の部分に迫撃砲を据え、坑道部は従事する兵士の待避所などとして使用されたものと思われます。この砲掩体の方向から、主に北側への交戦が想定されます。人工壕は、両者とも２方向に貫通しており、１・２か所の小部屋があるので、兵士の一時的な拠点であったかもしれません。

砲掩体近景

砲掩体に取りつく坑道

砲掩体内軍靴散布状況

人工壕

愛楽園早田壕

名護市屋我地済井出にある避難壕群で、名護市教育委員会によると、50 基の壕口が近年まで存在していたようです。この地は、昭和 13（1938）年に沖縄県立国頭愛楽園として創設され、昭和 16 年には国に移管され、現在は国立療養所沖縄愛楽園となっています。

昭和 18（1943）年５月には、初代園長塩沼英之助が寮舎の前に 40 名前後が退避できる無蓋壕が造られます。昭和 19（1944）年７月には、戦局の更なる悪化に備えた二代園長早田皓が園内の丘陵に横穴を掘ることを計画し、働ける入園者により現在も残存している避難壕を構築したようです。

現時点で、壕が集中して見つかっているのは、南北に伸びる細長い丘陵の北側です。最も良好に残存しているのは、丘陵中央に位置する全長 70 mに及ぶ平面形は大きくＹ字状になる壕群です。丘陵南側には、３基の壕口が連接する壕群があるが、そのうちの１本の坑道は長さ 18 mに及んでいるが、とりつく小部屋が見られないため、未完成の壕である可能性もあります。丘陵北側には 12 基の壕口が個別に存在しているように見えるが、このうちの幾つかは本来は連接していたものが、後世の削平に削平を受けたものと考えられます。

このように、各壕は幾つかの壕口があるが、その入口の広さは幅 0.9 m程度と狭く、内部に入ると幅 1.5 m前後の坑道に、奥行 1.5 ～ 3.0 m前後の小部屋が取りつくという形になっています。壕内には、壁を掘り込んで灯りを置く場所や、棚状の凹み、木材や導線を支えるための壁に打たれた鉄釘などが多く残ります。また、扉が設置されていたと思われる岩盤の凹みや、カマド跡も見られます。

壕口近景

壕内近景

壕内カマド

壁に打たれた大きな鉄釘

沖縄歴史年表

※1……沖縄本島時代区分　※2……八重山諸島時代区分

白保…白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）

西暦 前50万～1万 / 前1万～前5,000 / 前4,000 / 前3,000 / 前2,000 / 前1,000 / 0 / 後100 / 後200 / 500

- 時代区分※1：旧石器時代 / 縄文時代（早期・前期・中期・後期・晩期）／弥生～平安並行時代
- 時代区分※2：下田原期 / 無土器期
- 沖縄の様相：
  - 港川人が現れる
  - 山下洞人が現れる
  - 局部磨製石斧を使用
  - 曽畑式土器が入る
  - 土器の個性化がはじまる
  - 市来式土器が入る
  - 貝・骨製の装飾品がつくられる
  - 丘陵上に集落を形成
  - 海岸砂丘上に集落を形成
  - シャコガイ斧がつくられる
  - 弥生島が無文土器時代となり
  - 鉄などの弥生文物が流入
  - 貝交易の盛期
  - 丘陵上での生活がはじまる
- 今回対象となる遺跡など：白保 / 白保 / 白保 / 白保
  - 県内遺跡（船越原遺跡・渡嘉敷村）
  - 基地内文化財（宜野湾市）
- 日本：旧石器時代 / 縄文時代（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期）／弥生時代（前期・中期・後期）／古墳時代
- 中国：新石器時代 / 青銅器時代 / 殷 / 周 / 春秋戦国 / 秦 / 漢 / 三国 / 晋 / 五胡十六国 / 南北朝
- 日本・中国の様相：
  - 北京原人が現れる
  - 柳江人が現れる
  - 局部磨製石斧を使用する
  - 細石刃を使用する
  - 弓矢の使用が始まる
  - 土器製作が始まる
  - 縄文海進が始まる
  - 尖底土器を製作する
  - 仰韶（彩陶）文化が形成される
  - 黄河文明が興る
  - メソポタミアに都市国家が興る
  - 海進が最大になる
  - 平底土器を製作する
  - 竜山（黒陶）文化が形成される
  - 青銅器文化が興る
  - ギザの三大ピラミッドの建設
  - インダス文明興る
  - 小焼土器を制作する
  - 大規模な集落が形成される
  - 殷が都市国家の覇者になる
  - 貝塚の大規模化と土偶の増加
  - 亀ヶ丘式土器文化が広がる
  - 周が華北を統一する
  - 鉄器の使用が始まる
  - 仏教の成立
  - 弥生文化の成立
  - 秦始皇帝による中国統一
  - BC221 五銖銭が鋳造される
  - BC118 環濠集落の形成
  - AD57 奴国王が金印をたまわる
  - 甕棺が盛期
  - このころ優国大乱と記される
  - このころローマが最大版図
  - AD239 卑弥呼が親魏倭王の冠をたまわる
  - このころ後の五王による遣使
  - 前方後円墳の盛期
  - 須恵器の生産が始まる
  - 敦煌の石窟寺院の造営が始まる
  - AD538 仏教の伝来

黒字：日本
青字：中国
茶色字：世界

西暦 600 / 700 / 800 / 900 / 1000 / 1100 / 1200 / 1300 / 1400 / 1500 / 1600 / 1700 / 1800 / 1900

- 時代区分※1：弥生～平安並行時代 / グスク時代（三山・第一尚氏・第二尚氏（前期））／第二尚氏（後期）琉球近世 / 沖縄県（近代・戦後）
- 時代区分※2：無土器期 / 新里村期 / 中森期 / パナリ期
- 沖縄の様相：
  - 714 信覚・球美人らが帰朝
  - このころ開元通宝が入る
  - 751 鑑真ら阿児奈波島に漂着
  - 土器が無文化する
  - 1187 舜天即位と伝わる
  - 陶磁器・石鍋・カムイ焼が流通
  - 農耕が広まる
  - 1372 察度が明に入貢する
  - このころ首里城成立が
  - 各地に大型グスク出現
  - 1429 尚巴志による沖縄本島の統一
  - 1453 志魯・布里の乱により
  - 1458 阿麻和利の乱
  - 1477 尚真が即位
  - 1500 オヤケアカハチの乱
  - 1529 守礼門が建てられる
  - 1609 島津による琉球侵略
  - 1616 一六による湧田窯の開窯と伝わる
  - 1660 首里城が失火により炎上
  - 1689 壺屋への窯場統合
  - 1709 首里城が失火により炎上
  - 1799 識名園の創設
  - 1879 琉球処分
  - 1933 首里城の解体修理
  - 1945 沖縄戦
  - 1972 日本復帰
  - 1992 首里城正殿が復元される
  - 2000 首里城跡など世界遺産登録
- 今回対象となる遺跡など：白保
  - 基地内文化財（宜野湾市）
  - 海軍病院建設予定地内（普天間古集落遺跡・宜野湾市）
  - 首里城跡（那覇市）
  - 円覚寺跡（那覇市）
  - 首里高校内中城御殿跡（那覇市）
  - 基地内文化財（宜野湾市）
  - 海軍病院建設予定地内（普天間古集落遺跡・宜野湾市）
- 日本：古墳 / 飛鳥 / 奈良 / 平安 / 鎌倉 / 南北朝 / 室町（戦国・安土桃山）／江戸 / 明治 / 大正 / 昭和 / 平成
- 中国：隋 / 唐 / 五代十国 / 宋 / 金 / 元 / 明 / 清 / 中華民国 / 中華人民共和国
- 日本・中国の様相：
  - 607 隋の大運河の建設が始まる
  - 621 法隆寺の建立
  - 630 遣唐使の派遣始まる
  - 唐の領土が最大版図となる
  - 710 平城京へ遷都
  - 794 平安京へ遷都
  - 894 遣唐使の停止
  - 天平文化が形成される
  - 国風文化が形成される
  - このころ景徳鎮窯が開かれる
  - このころ亀泉窯が開かれる
  - 藤原氏の全盛
  - このころ羅針盤・火薬の発明
  - 1126 靖康の変が起こる
  - 源平の対立
  - 陶磁器の輸出が盛んになる
  - 1274・81 モンゴルの襲来
  - 前期和寇の盛期
  - 景徳鎮で青花が完成する
  - 後期和寇の盛期
  - 1467～77 応仁の乱
  - ルネサンスの最盛期
  - 1492 コロンブスがアメリカへ到達
  - 明の赤絵が発達する
  - 有田で磁器をつくり始める
  - 1639 鎖国令が出される
  - 元禄文化の形成
  - 清の領土が最大版図となる
  - 1789 フランス革命勃発
  - 1840 アヘン戦争
  - 1894～98 日清戦争
  - 1914～18 第一次世界大戦
  - 1939～45 第二次世界大戦
  - 1972 日中国交正常化・世界遺産条約制定

発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的にしています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。

「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく３つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価をおこなうための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなった遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりがありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないわけですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては発掘調査を実施している市町村教育委員会、若しくは以下にお問い合わせください

○沖縄県教育庁文化財課　記念物班　埋蔵文化財担当　　TEL 098-866-2731

○沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班　　TEL 098-835-8752

平成 26 年度発掘調査等予定一覧

遺跡名・事業名	所在地	調査目的・原因	調査予定期間
首里城跡発掘調査「継世門北地区・書院南地区」	那覇市	国営首里城公園整備に伴う発掘調査	7～1月
首里城公園（中城御殿跡）発掘調査	那覇市	県営首里城公園整備に伴う発掘調査	6～11月
首里高校内中城御殿跡発掘調査	那覇市	首里高校建て替えに伴う発掘調査	4～12月
東村跡発掘調査	那覇市	離島児童・生徒支援センター(仮称)建設に伴う発掘調査	7～12月
県内遺跡詳細分布調査(阿波連浦貝塚)	渡嘉敷村	県内各地域の埋蔵文化財分布調査基礎資料作り	8～9月
基地内文化財分布調査	宜野湾市	基地内に所在する遺跡の把握	9～2月
白保竿根田原洞穴遺跡確認調査	石垣市	重要遺跡範囲確認調査	6月
戦争遺跡詳細分布調査	県内各地	重要な戦争遺跡の詳細な遺構確認調査	随時

平成 26年度企画展
「発掘調査速報展 2014」
発行日　2014（平成 26）年１１月21日

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　098-835-8751　FAX　098-835-8754
URL　http://www.pref.okinawa.jp/edu/maizo

沖縄県立埋蔵文化財センター

行事予定のご案内

関連文化講座

第 59 回文化講座

■発掘調査速報展 2014　その 1

日時：平成 26 年 11 月 22 日（土）　13：30 開始（13：00 開場）

会場：当センター研修室　　講師：当センター職員

①海軍病院建設予定地内（普天間古集落遺跡）【宜野湾市】
②円覚寺跡【那覇市】
③首里高校内中城御殿跡【那覇市】
④首里城跡「東のアザナ北地区・銭蔵東地区」【那覇市】
※先着 140 名　予約等不要・参加無料

第 60 回文化講座

■発掘調査速報展 2014　その 2

日時：平成 26 年 11 月 29 日（土）　13：30 開始（13：00 開場）

会場：当センター研修室　　講師：当センター職員

①戦争遺跡（伊計島砲台跡・他）【本島内各地】
②県内遺跡（船越原遺跡）【渡嘉敷村】
③基地内文化財（喜友名東原第四遺跡・他）【宜野湾市】
④白保竿根田原洞穴遺跡【石垣市】
※先着 140 名　予約等不要・参加無料

今後の催しのご案内

◇「白保竿根田原洞穴遺跡」関連イベントを企画中です。

企画展

■「白保竿根田原洞穴遺跡」関連企画展（予定）

日時：平成 27 年 1 月頃

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター企画展示室

講演会

■「白保竿根田原洞穴遺跡」関連講演会（予定）

日時：平成 27 年 1 月頃

会場：沖縄県立埋蔵文化財センター研修室

講師：未定

※先着 140 名　予約等不要・参加無料

※詳細が決まり次第、当センターホームページやマスコミ等を通じて広報致します。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7　　TEL 098-835-8751（代表）　FAX 098-835-8754　　http://www.pref.okinawa.jp/edu/maizo

●休所日　◇毎週月曜日
◇国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）
◇年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）
◇慰霊の日（6 月 23 日）
※祝日と月曜日が重なった場合は、翌日の火曜日も休所

●開所時間　◇午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

●交通　◇沖縄自動車道西原 IC より車で 7 分
◇市外線バスターミナル発　那覇バス 97 番
「琉大附属病院前」下車 3 分